

京都市立高倉小学校における共同授業研究の取り組み

1. 京都市立高倉小学校との連携

教育方法学講座教育方法学分野（以下、教育方法研究室と記す）では、「子どもが育つ、教師が育つ、院生が育つ」を合言葉に、2003年度から京都市立高倉小学校（以下、高倉小と記す）との共同授業研究、通称「プロジェクトTK」に取り組んでいる。「子どもが育つ、教師が育つ、院生が育つ」という合言葉は、「子どもが育つ」という目標に向かって、先生と院生が協働して取り組み、その中でお互いに実感した自身の成長を言葉に表わしたものである。

プロジェクトTKは2010年度で8年目を迎えた。初年度から共同授業研究に参加している院生が卒業し、高倉小・教育方法研究室ともメンバーの入れ替わりが起きている。



▶2010年度教育方法研究室メンバー

プロジェクトTKは、大学教員ではなく、教育方法研究室の院生が主導で行っているプロジェクトである。院生が主体となった小学校との共同研究は、全国的にも珍しいだろう。

院生主体の研究という特性上、プロジェクトTKは、教育方法研究室の共同研究の中で重要な位置を占めている。院生の教育方法学者としての力量形成にも大きく寄与している。

2. 院生の活動

高倉小での院生の活動には二つの柱がある。一つ目は、授業を観察し、授業の事実を先生に伝えることである。院生は日常的に教室に入り、各自ノートを取りながら授業を観察する。「授業は先生のもの」という立場から、院生が授業の補助をすることはない。あくまでも観察することに徹している。

授業を見せていただいた後には、先生に対してフィードバックを行っている。見取った子どもの姿などを授業前後にその場でお伝えすることもあれば、感想（全体的な感想、子ども一人ひとりの学びの姿、話

し合いでの学びの深まりなど）を書いて後日先生にお渡しすることもある。この感想は、教育方法研究室の院生に対しても、簡単な授業記録とともにメーリングリストで共有している（個人名はイニシャルで）。

また、高倉小の研究授業や研究発表会に際しては、先生の許可を得た上で、ビデオや写真といった記録を残したり、先生と子どもたちの発言一つひとつを記した詳細な授業記録を作成したりして、先生にお渡ししている。

これらの記録は、院生内で定めた情報共有ルールに則り、プライバシーを配慮した上で高倉との共同研究に活用している。授業の様子を文章化したものは、「院生さんの目」という形で、高倉小の研究紀要に掲載されている。

このように授業の事実を伝えることを、私たちは「スコアラー」としての役割と呼んでいる。この関わり方について、先生たちからは、「教師は自分の発言が子ども一人ひとりにどのような影響を及ぼしたかが感覚でしかわからないから、教師が見切れない子どもの姿、子どもがどう変わったかを見てくれるのはありがたい」などの評価をいただいている。

二つ目の柱は、授業づくりへの参加である。この活動は、年に数回の研究授業の単元と、公開発表会の授業の単元を中心として、以下の5つのプロセスで行っている。

- ①該当単元の教材研究（単元の教科内容、予想されるつまづきとその解決法、学習課題・指導過程の提案など）を行い、指導案検討の前に授業者の先生に伝える。
- ②指導案検討に参加する。検討は、高倉小の研究単位である算数科部会でなされる。
- ③該当単元（場合によってはその前の単元も）の授業を観察し、授業者の先生に感想を伝える。
- ④研究授業・公開発表会の授業を観察し、高倉小で行われる事後検討会にも参加する。
- ⑤大学院生間で単元全体の授業を振り返り、着目した授業者の先生の手だてと、子どもの学びの深まり、今後の指導へのヒントをまとめ、授業者の先生にお伝えする。

教材研究や指導案検討にも参加するのは、先生のねらいや課題を共有するためである。そこで聞いた先生の要請に応じて実践例や理論研究の知見を提案したり、先生の課題意識に照らしながら授業中の子どもたちの言葉、記述を感想で率直に伝えたりすることで、先生のねらいの実現・課題の解決をめざしている。事後検討会では、授業での先生の手だてによってこれらが実現・解決されたのかを、授業者を含む先生たちと院生で、授業の事実に基づいて吟味する。そして、次の単元に向けた方向性や具体的な手だてを議論している。

このように、先生の願いに寄り添いながら先生とともに授業づくりに関わる役割を、私たちは「伴走者」

と呼んでいる。その成果は、「京都大学との連携『プロジェクトTK』」という形で、高倉小の研究紀要に掲載されている。



▶授業を観察する大学院生たち（高倉小学校にて）

3. 2007年度～2010年度の取り組み

2007年度は、グループ学習を共同研究のテーマとして設定した。主に算数と理科の授業観察を行いながら、よいグループ学習のあり方を定型化したり、高倉小で行われてきた典型的な授業スタイルにグループ学習がどのように位置づくのかを検証したりした。

2008年度の共同研究のテーマは、ワークシートであった。子どもの学習を促進させるためには、どのようなワークシートが有効であるのかを、社会・算数・理科の授業観察の記録から一般化することを試みた。

2009年度の研究テーマは、思考力を深める記述指導であった。研究対象を算数に絞り、子どもの記述における思考力の深まりの具体像と、思考を深めるためのワークシートや振り返りの工夫を抽出できた。しかし、

思考力を効果的に高めるには、思考力を見取れる評価方法を考え出す必要があるという課題が浮かび上がった。思考力は、知識の暗記しか評価できない従来のペーパーテストでは捉えにくいためである。

そこで今年度は、算数科において、パフォーマンス評価の研究をはじめ取り入れた。パフォーマンス評価とは、知識や技能を活用することを求める評価方法である。自由記述問題や観察、実技テストなどがある。

まず、4年生「面積」の単元において、授業者と院生の共同で、パフォーマンス課題を作成した。学校行事の理科実験をする部屋を決めるために、教室（長方形）と廊下（L字型）のどちらが広いかを調べようというものである。パフォーマンス課題とは、実生活を映し出すリアルな文脈において、知識・技能を総合して使いこなすことを求める課題を指す。

次に、子どもの作品をもとに、授業者を含む高倉小の先生たちと院生で、ルーブリックを作成した（表を参照）。ルーブリックとは、パフォーマンスの成功のレベルを示す数段階の尺度と、各レベルで期待されているパフォーマンスの特徴から構成される評価基準表である。3が一番高い段階である。

4. おわりに

今年度は、パフォーマンス評価の研究、とくにルーブリック作りを通して、子どもたちの思考のつまづきや優れた姿を、先生たちとともに具体的に捉えることができた。ただし、評価の結果をふまえて授業改善の手だてを構想することは十分にはできなかった。ルーブリックを子ども自身に作成させたり、作品の検討会を授業中にしたり、評価を授業改善に活かす具体的な道筋を示すことが今後の課題となるだろう。

（文責：細尾 萌子）

表 4年生算数「面積」におけるルーブリック

3	・これまでの授業で学習したこと（1mは100cm／面積は1cm²がいくつ分で表す）を使って説明している。 ・本時の学習で学んだこと（1mは100cm／100cmということは1cm²が100あるということ／1cm²がたてに100こ、よこに100こ）を使って説明している。 ・用語（たて、よこ、正方形、一辺、1cm²）を正しく使って説明している。 ・式と説明が一致している。・ふりかえりに初めて学習した内容が書かれている。
2	・これまでの授業で学習したことを使って説明しようとはしているが、他の人にわかるようには説明できていない。（たてに〇こ、よこに〇こ、だけで「何が〇こ」や「1mが100cm」という説明がない） ・本時の学習で学んだことを使っているが、用語の使い方が不十分（長さ×長さ） ・式と説明が一致している。 ・ふりかえりに初めて学習した内容が書かれている ・自力解決では説明が不十分であるが、ふりかえりで十分な説明ができています
1	・自力解決ができていない。 ・自力解決ができた場合も、これまでの授業で学習したことを使って説明できていない。思考過程を説明できていない。 ・用語を正しく使えていない（正角形） ・式と説明が一致していない。 ・ふりかえりを書いているが、本時の学習で学んだことが十分に入っていない。

【各段階の子どもの作品例】

- 3：式 100×100=10000 説明 なぜこの式になったかという、1mは100cmだから1cm²がたてに100こ横に100こだから横×たてつまり100こ×100こなので100×100=1万になりました。振り返り 今日は練習問題の求め方を学びました。後、1m²には1cm²が10000こも入る事が分かりました。理由は1mは100cmだから横に100こたてに100こで100×100で10000になる事が分かった。
- 2：説明 1m=100cm 100×100=10000 1mが100cmだから1cm²が1cmなので、たての100cmとよこの100cmをかけて、一万こが入るということです。振り返り 今日学習してわかったことは、1mに10000こ入るということ、プリントの面せきのもとめかたを勉強しました。これらもつかって明日も勉強したいと思います。
- 1：振り返り 1mの中は1cm²が10000cm²もあるんだとわかりました。100cm²が1列に1こあるんだと思いました。